

日本災害情報学会 第9回学会大会 被災地視察

■開催日：2007年11月17日（土）8：30～12：00

■場所：長崎県島原市、南島原市（火砕流で報道関係者らが亡くなった「定点」や農業研修所跡、旧大野木場小学校と大野木場砂防みらい館、安中三角地帯）



2007年11月に、雲仙・普賢岳のふもとの長崎県島原市で開かれた第9回学会大会では、例年の大会シンポジウムなどに替えて、被災地視察を行いました。

1991年6月3日の火砕流で亡くなった報道関係者がいた「定点」や、消防団員の詰め所だった北上木

場農業研修所跡、火砕流で焼けた旧大野木場小学校と隣接する国土交通省雲仙復興事務所の大野木場砂防みらい館、地盤かさ上げを住民主体で実現した安中三角地帯の現場を訪れ、関係者の話を聞くことで、災害情報に関わるさまざまな問題を改めて考えさせられ、研究発表とは違った成果を得ることができました。

学会大会2日目の17日午前8時半、約90人の学会員が島原市役所前などに集合、3台のバスに分乗して出発しました。バスには、大会実行委員会のテレビ長崎報道部の樋田禎子記者らが分乗して乗り込み、車窓から見える200年前に山体崩壊をした眉山のことなどを解説。最初の視察場所である同市上木場地区の「定点」に向かいました。

■「定点」

1990年11月から198年ぶりに始まった雲仙・普賢岳の噴火は、翌年2月から活動を活発化し、5月24日に初めての火砕流を観測。山頂付近の溶岩ドームの成長に伴う崩落で、煙を噴き上げながら山を下ってくる火砕流の衝撃的な映像が、全国のお茶の間に届けられました。山頂との間に遮るものがなく撮影に最適な上木場地区の道路脇は、避難勧告地域内にありながら多くの報道陣が集結して「定点」と言われ、道ばたにタクシーを止めてカメラを山に向けていたのです。

6月3日午後4時8分、溶岩ドームの半分が崩壊した火砕流で、定点付近では、毎日新聞3人、テレビ長崎3人、NHK2人、日本テレビ2人、九州朝日放送2人、テレビ朝日1人、読売新聞1人、日経新聞1人、フリーカメラマン1人の計16人のマスコミ関係者と、報道陣



を乗せるための地元タクシー運転手4人、外国人火山専門家3人が亡くなっています。

砂防工事中で、通常は立ち入りが出来ない「定点」には、

木製の三角錐が置かれています。樋田さんによると、あれだけの犠牲を出した「定点」に何の目印もないのはかわいそうだと、地元住民らが作成してくれたそうです。国土交通省雲仙復興工事事務所の協力で、特別に立ち入りを許されたバスから下りた後、この三角錐に阿部会長が花束を供え、参加者全員で犠牲者の冥福を祈りました。

この場所には、火砕流で消防団員だった息子さんを亡くされた方や元町会役員にも来ていただき、亡くなった消防団員が避難勧告地域内に向かう前に最後に言葉を交わした時の様子を証言。避難所で「『今のお気持ち』とマイクを向けられたときは、ナイフを突きつけられたようだった」という当時の思いも吐露してくれました。一方で、その後の報道について「私たちの生活を勇気付けてくれた樋田さんは命の恩人」とも語り、災害時の報道のあり方について、改めて考えさせられました。

■農業研修所跡

定点から少し下流に下ったところにあった農業研修所跡は、火砕流や土石流で埋もれていた消防車やパトカーなどの残骸も展示され、災害遺構として整備されていました。

ここにいて犠牲になった消防団員らは、一時は下流の安全なところを拠点にしていたのですが、6月1日に避難勧告が一部地域で解除されたことや、2日に一部報道陣が避難住民宅の電源を勝手に使って警察に厳重注意されたこともあり、再び避難勧告地域内の農業研修所に戻っていたのです。樋田さんは学会大会冒頭の研究発表で「マスコミの悪い面があまりにも眼が付いた。12人の消防団員もある意味ではマスコミの犠牲者だ」と、改め





て指摘していました。ここでも消防団の半鐘を再建した「慰霊の鐘」に花束を備えた阿部会長は「火砕流に関する知識を多くの人が持っていなかった。正しい知識で災害に備える大切さをあらためて感じた」と話していました。

現場付近の水無川では、依然として無人化工法による砂防工事が行われており、下流域から上流に向かって砂防ダムが設置が進められていました。

■旧大野木場小学校



午前10時過ぎには、91年9月15日の火砕流で焼けた旧深江町立大野木場小学校と、隣接する大野木場砂防みらい館に到着。鉄筋コンクリート造りの校舎

は、火砕サージで全焼し、ガラスが割れ、サッシが曲がり、掃除用具を入れるロッカーが横倒しになったままで保存されていました。校庭にあった葉が青々と茂っていたイチョウの木は、幹に黒こげになった跡が残っており、高温で曲がった鉄棒や一方方向が焦げて解けているタイヤチューブなども保存され、火砕流の恐ろしさが実感できるようになっていました。

砂防みらい館は、砂防ダムなどの工事の安全確保などのために作られた施設で、地下1階と1階には、火砕流に襲われる前の定点や農業研修所などの写真や、噴火のメカニズムや火山についての学習パネルなどが展示されていました。この日は、山頂から水無川の砂防施設までが一望できる4階の監視室にも入ることができ、溶岩ドームの監視設備などを見学しました。緊急時のために備蓄されている、水や酸素ポンプなどが置かれている地下1階の倉庫まで見せていただきました。



同小は、土石流被災家屋保存公園などの災害遺構や水無川の砂防えん堤などの防災施設、湧水などの自然の恵みも含めた「平成新山フィールドミュージアム」

の一つとなっており、みらい館とともに無料で見学できるため、観光スポットとなっています。この日も、旅館のマイクロバスが横付けされ、観光客が訪れていました。

■安中三角地帯

最後に訪れたのが、安中三角地帯でした。水無川左岸の一角が島原市の安中地区で、葉たばこや果樹、酪農な

どの農家や、石堀に囲まれた住宅があったところ。92年や93年の梅雨期などに発生した土石流が、途中から南側に曲がっている水無川の堤防を越えてま



っすぐ流れ下ったため、安中地区の住宅地が襲われ、水無川との間に挟まれた地域が安中三角地帯と言われるようになりました。93ヘクタールのこの地域には、噴火前は324世帯、1183人が生活をしていましたが、7割の家屋が土石流に埋まってしまいました。

その地に、さらに土石流の流路を作るなどの砂防工事を出た不要な土砂を積み上げ、農地や住宅地としたのが、安中三角地帯のかさ上げ事業で、普賢岳噴火災害の復興を象徴する場所でもあります。

ここでは、地元でかさ上げ事業を推進し、今はNPO法人雲仙普賢会の理事長をしている大町辰朗さんが説明をしてくれました。



次々に我が家や懐かしい風景が埋まっていく中で、集団移転も迫られたそうです。土砂に埋まらずに残った木々の緑などに励まされ、あえて土砂を埋めることで住み慣れた土地に住み続けられる可能性があるとして、国や県市に働きかけを開始。土石流に襲われてはいなかった土地の住民も含めて合意形成をなすとげ、住民発案による平均6メートルのかさ上げ事業を成し遂げた話を聞きました。長期化する噴火災害に備えた支援制度がないなかで、メディアを通じて断片的に伝えられる情報に、住民が右往左往させられた時期があったなども、災害情報を考えるものにとっては教訓的でした。

砂防や住宅、農業の制度をフルに活用したかさ上げ事業が行政の手によって進められる中で、元のまち並みにあった湧水の「われん川」を、住民らも参加して残す工事も行われたそうです。堤防内に下りて、ふつふつと出てくる清冽なわき水を汲んで口にする人もいました。われん川のほわりには

1. 5メートルぐらいの高さに育った「廣井桜」が、復興を見守るように植えられており、07年の春には初めて花を咲かせたと、大町さんが紹介してくれま



した。(文責・中川和之 時事通信社)